《戦時日本語教育史研究資料探訪》

**『ジャワ年鑑』に記載されたジャワ軍政期日本語教育の概況（抄録）**

**田中 寛**

**（新世紀人文学研究会、戦時日本語教育史研究会）**

1944年に7月に発行された『ジャワ年鑑』（ジャワ新聞社刊、二円八十銭）はその後、継続して刊行されることはなかったが、総四七二頁余、四六判には冒頭の口絵写真40葉に続いて、「ジャワ篇」と「日本篇」「附録」にわかたれ、「ジャワ篇」には1942年3月の「ジャワ戡定作戦」からはじまる「ジャワ年史」に至るまで70の項目を数える\*。軍政期、軍政下の教育については、「教育」「学校教育」「教員養成」「日本語教育」「社会教育」の計十頁にわたる記述の外、関連周辺項目として、「ジャワ奉公会」「隣保組織」「防衛義勇軍」「宣伝報道」「宗教」「衛生」「啓民文化指導所」「映画」「放送」「新聞」なども参照する必要があるだろう。一方で、「華僑」の実態と統制と動員政策については記述がない。これは最重要機密事項であったからだろうか。同書は1972年にビブリオ社から復刻版が出されているが、以下に日本語教育、教科書・編纂の記載のみ復刻した。旧字体仮名遣いは現代表記に直し、適宜句読点を補充した。(\*「戡定」（カンテイ）は「平定」の意味)

説明文中にある「日本語学力検定試験」、「カナジャワシンブン」を校閲した軍政監部文教局の実態、日本語教科用図書の分析については、なお実態の究明が求められる。

日本占領下、日本軍政期のジャワにおける占領政策の一環としての日本語教育施策については倉沢愛子『日本占領下のジャワ農村の変容』（草思社1992）が嚆矢であるが、その後、倉沢愛子編『ジャワ・バル』（復刻、龍渓書舎1992）、木村一信編『ジャワ新聞』（復刻,

同2013）などにより、その実態が明らかにされてきたが、今年（2023年）になって大きな研究の進展があった。ひとつは津田浩司『日本軍政下ジャワの華僑社会――『共栄報』にみる統制と動員』（風響社2023）、もうひとつは小林和夫『「伝統」が制度化されるとき――日本占領期ジャワにおける隣組』（春風社2023）である。前者には日本青年文化協会から派遣された日本語教師黒野政市の現地日本語教育への関わり、後者では「カナジャワシンブン」についての記述がみられる。東南アジア地域研究学者、インドネシア現代史研究者の研究から、これまでの日本語教育史研究の空白が見えてくる。現地住民に強制し、塗炭の苦しみをあたえた日本語教育施策の実態は今後も究明されるべき課題である。

**日本語教育**（138－139頁）

　日本語教育は日本語を通じて日本の国民生活、日本精神および日本文化を理解会得せしむると共に、日本語を大東亜共通語たらしめ共栄圏民族の思想を統一し、その団結強化に資し、共栄圏建設の大業に挺身貢献せしむるを目標とし、現下ジャワ文教の最も重要なる施策の一である。

　日本語教育は現地住民の日本に対する信倚感\*に基き、ジャワ戡定以来極めて大きな効果を挙げて居るが、昭和十八年日本語教員要員の到着赴任と共に本格的段階に入り、同年十一月軍政監達に依る日本語普及要領の交付に依って、日本語教育の諸方針は確立せられた。普及すべき日本語は日本国内における標準日本語たること勿論である。（\*「信頼感」の意）

▲各種学校における日本語教育

　全島全校全学年正科時間数は左記の通りである。

**国民学校**一年３、二年４、三年５、四・五・六年６

**初等中学校**　各学年７

**女子初等中学校**　同６

**師範学校**　一年９、二・三年８、四年６

**女子師範学校**　一・二・三年８　四年６

**高等中学校**　文科各学年１０、理科一年９、二・三年８

**上級農学校**　全学年６

△日本語学校

**（一）軍政監部直轄学校**

ジャカルタ上級日本語学校　昭和十九年二月九日開校。

軍政監部通訳員養成所（総務部及び文教局協働所管）（ジャカルタ特別市）を十二月開設し全寮制度で厳正な訓練を実施している。生徒数六五名。

**（二）地方施設**

ジャカルタ日本語学校は十一月迄軍政監部直轄であったが、その後ジャカルタ特別市に移管せられ、本科、補習科、研究科を有し、生徒数一，二〇〇名、各州の日本語学校（講習会及び研究会などを含む）も漸次増加している。現在数二，二一一、修学期間二ヶ月乃至三ヶ月、生徒総数一二二，九一八

**△日本語普及教育に関する事業**

　昭和十七年十一月八日、日本語学校指導に関する件、通牒せらる。国民学校児童日本語協議会開催せらる。

　昭和十八年七月、日本語学力検定試験要綱告示せらる。

　昭和十八年十一月、日本語普及教育要綱告示せらる。中等学校及び高等専門学校生徒日本語競技会開かる。

　昭和十八年十一月三日より、全ジャワマライ新聞全部に毎日日本語欄を設く（原稿は文教局が作成）。

　昭和十八年十二月　日本語学力検定試験を実施す。受験者総計約二〇，〇〇〇名。合格者総計約一四，三〇〇名。同試験合格者は月手当を支給せらる。（一級１５盾、二級１０盾、三級６盾、四級３盾、五級１盾\*）（\*「盾」はインドネシアの通貨「ルピア」の意）

　昭和十九年一月一日ジャワ新聞社より「カナジャワシンブン」が創刊せらる。原稿は文教局が校閲。

**教科書・編纂**

　大東亜理念に基づく文教施策の施行と共に、教科用図書の改編は必至であり、これに対する処置は、皇軍上陸直後から着々実施されて来た。先ず昭和十七年度は皇軍上陸直後の困難なる条件の下に厖大な旧マライ語教科書の検討、新マライ語教科書の編纂、日本語教科用書「日本語」巻一、巻二の編纂刊行がなされ、引き続き昭和十八年度は「日本語」巻三、巻四の編纂刊行及び「日本語」巻一の改訂、新マライ語教科書五十七種の編纂刊行がなされた。

　以上は応急の処置であったが、その間、教育の重要性に鑑み、新教科書特に国民学校用を重点とする本格的な教科書を、可及的速やかに刊行すべく、鋭意準備がなされた。かくて、新教科書編纂の着眼は、一言にしていえば、大東亜共栄圏の構成要素としての住民の基礎錬成という点にあり、種目別に述ぶれば、教育勅語の御精神に則る「修身」巻一～巻六の編纂、ジャワ軍政監達「日本語普及および教育要綱」による日本語教科用書「日本語巻一～巻六および文法書、会話書の編纂、大東亜建設理念の基たる日本肇国の歴史を與うべき「古事記ものがたり」（日本語）の編纂、従来の欧米の謀略的歴史、地理を是正すべき大東亜の綜合的歴史（日本を中心とする）、大東亜を中心とする地理の教科用図書の編纂、アジア的情操を錬成すべき「唱歌」巻一～巻六の編纂、その他教練指導書、標準となるべき日馬、馬日辞典の編纂等であり、これらは既に編纂、若しくは印刷に着手され、昭和十八年度乃至十九年度に完結される予定である。

　これと関連してマライ語教科書の積極的改正にも着手され、近き将来軍政下に於けるジャワの教育態勢は、内容に於いても、著しく充実するものと見られるに至った。

（以下、社会教育　青年団　へと続く）